

機関番号：33803

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2010

課題番号：21730710

研究課題名（和文） 英語教育における言語的知識の形成とコミュニケーション活動との有機的連関構造

研究課題名（英文） A Study of Organic Link Structures between Building Linguistic Knowledge and Communicative Activities in teaching of English

研究代表者

亘理 陽一 (WATARI YOUICHI)

静岡理工科大学・総合情報学部・講師

研究者番号：90509241

研究成果の概要（和文）：英語に触れる機会が基本的に授業に限られている環境での英語教育に対して妥当なカリキュラムを編成するために、文法的知識・語用論的知識に関してどういう内容を明示的に指導し、それをどういったコミュニケーション活動で運用させることが有効なのかを、理論的・実証的に考察した。いくつかの文法概念について具体的な授業プログラムを作成・実践し、コミュニケーション活動および授業における使用言語のバランスについて示唆を得た。

研究成果の概要（英文）：This study considered theoretically and empirically what to teach explicitly in the area of grammatical and pragmatic knowledge, and how to associate it effectively with communicative activities, in order to organize appropriate curricula for EFL contexts. Several lesson plans about grammar was developed and carried out at several classrooms. The results provided suggestive evidence for the role of communicative activities and balance of target language and first language use in teaching and learning English.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：カリキュラム構成・開発、英語、教育学、コミュニケーション活動、文法、使用言語のバランス

## 1. 研究開始当初の背景

言語的コミュニケーション能力は、文の産出にかかわる規則の体系に関する知識（文法的知識）と、場面に最適な文の選択にかかわる原理の体系に関する知識（語用論的知識）からなると考えられる。日本のように英語に触れる機会が基本的に授業に限られている（EFL）環境での英語教育で

は、高等教育・政治・経済活動において日常的に英語が使用されている（ESL）環境での英語教育とは異なり、両知識を明示的に教えることが必要不可欠である。

一方で、言語的コミュニケーション能力を高めるためには、こうした知識を現実、もしくは現実に類似した状況で運用する機会が適切に設けられなければならない。第

二言語習得研究ではそうした運用の性格やそこでの機転を利かせた対処にかかわる知識（方略的知識）の意義や内容が論じられており、優れた教師たちの実践から学習者のニーズに応えるコミュニケーション活動の内容・方法が蓄積されつつある。しかし、各知識に対して EFL 環境に適した教育内容が十分に準備されているとは言えず、それとコミュニケーション活動、ないしは方略的知識との関係も自明ではない。

そこで、妥当な英語教育カリキュラムを編成するために、どういった内容を明示的に指導し、それをどういったコミュニケーション活動で運用させることが有効なのかを体系的・実証的に考察することが課題となる。ESL 環境では特定の文法形式の使用を狙った活動形態が提案されており、それを日本の英語教育に採り入れる実践もあるが、既存のカリキュラムに活動を「付け足す」のではなく、言語的知識の形成とその運用としてのコミュニケーション活動の有機的連関を明らかにすることが必要だと考えた。

## 2. 研究の目的

これまで、言語学的研究の成果に基づき、状況に応じた適切な使い分けの理解が得られるような否定表現・比較表現の教育内容とその順序構造を明らかにすることを試みてきた。

他方で、大学英語教育におけるスキーマ指導とその活用を伴うコミュニケーション活動の考察と実践を行ってきた。「スキーマ」とは、テキストの内容に関する背景知識や展開に関する修辭的知識を指し、英語に特徴的なスキーマを日本語を母語とする学習者が自然に身につけるのは難しく、明示的・継続的な学習が必要とされるものである。スキーマの活用が目的ではあるが、この中で成績・動機によらず学習者から高い評価を得るような、明示的知識を総体として運用するコミュニケーション活動の内容・方法を蓄積するに至った。

本研究では、こうしたコミュニケーション活動についての知見を活かしつつ、いくつかの文法概念の教育内容構成と授業実践を通じて言語的知識の形成とその運用としてのコミュニケーション活動の有機的連関、すなわち英語教育における「単元」の構造を明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

いくつかの文法概念についての明示的知識を形成する授業プログラムと、それを総体として運用するコミュニケーション活動の高校ないしは大学での授業実践を通じて冒頭の目的達成を図ることを企図した。ただし、この授業実践のためには、関連する

言語学的研究成果と先行研究を対象にした綿密な基礎研究が必要であったため、本研究では、以下の(1)~(3)の基礎研究に基づくアクション・リサーチを計画した。

- (1) 「教育文法」としての先行研究および授業実践事例の検討
- (2) 教育内容構成に有効な言語学的研究成果の検討
- (3) コミュニケーション活動の理論・実践事例の検討

## 4. 研究成果

- (1) カリキュラム編成の理論的検討の一環として、EFL 環境での使用言語のバランスに関する批判的考察を進め、授業を「英語で行うことを基本とする」ことの問題点を示した。
- (2) コミュニケーション活動の理論的枠組み検討の一環として、生徒が主体的に教えあい学びあう授業づくりのために英語教育における協同学習研究の現状・課題をまとめた。
- (3) 名詞の可算性・冠詞・数量表現・受動態・関係代名詞・比較表現・進行相・未来時を表す表現について作成した授業プログラムの授業実践を大学で実施し、分析を行った。
- (4) 副代表を務める高校英語教員との共同研究プロジェクトにおいて、コミュニケーション活動のためのすぐれた素材を収集し、教育内容・教材構成の作業を進め、アクション・リサーチに向けた準備を進めた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- (1) 亙理陽一、外国語としての英語の教育における使用言語のバランスに関する批判的考察、教育学の研究と実践、査読有、6 巻、2011 年、33~42 頁

[学会発表] (計 4 件)

- (1) 亙理陽一、外国語としての英語の教育における母語の役割に関する批判的考察、日本教育方法学会、2010 年 10 月 10 日、国士舘大学 (東京都)
- (2) 亙理陽一、外国語としての英語の教育における使用言語のバランスに関する批判的考察：授業を「英語で行うことを基本とする」のは学習者にとって有益か、北海道教育学会、2010 年 3 月 21 日、北海道大学 (北海道)
- (3) 亙理陽一、英語教育における協同学習研究の現状と課題、日本教育方法学会、2009 年 9 月 26 日、香川大学 (香川県)

(4) 亙理陽一、比較表現の授業プログラムにおける形容詞の絶対的・相対的用法の指導について、全国英語教育学会、2009年8月9日、鳥取大学（鳥取県）

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.ecrproject.com/>（生き方が見えてくる高校英語授業改革プロジェクト）

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

亙理 陽一 (WATARI YOUICHI)

静岡理工科大学・総合情報学部・講師

研究者番号：90509241